

- (31) 天正五年二月朝日付村井貞勝折紙案(頂妙寺文書編纂会編『頂妙寺文書・京都十六本山会合用書類』一)。
- (32) (天正四・五年)「諸寺勸進之内遣方」(『頂妙寺文書・京都十六本山会合用書類』四)。
- (33) 天正一十七年卯月二八日付前田玄以折紙案(『頂妙寺文書・京都十六本山会合用書類』一)。
- (34) (年未詳)六月三日付妙蓮上人書状(『頂妙寺文書・京都十六本山会合用書類』一)。河内将芳「戦国期京都における勸進と法華教団―新在家を中心に―」(世界人権問題研究センター編『救済の社会史』世界人権問題研究センター、二〇一一年)参照。
- (35) 高橋康夫『京都中世都市史研究』(思文閣出版、一九八三年)、同『洛中洛外 環境文化の中世史』(平凡社、一九八八年)。
- (36) 古川元也「天正四年の洛中勸進」(『古文書研究』三六号、一九九二年)、河内将芳「戦国最末期京都における法華宗檀徒の存在形態―天正四年付「諸寺勸進帳」の分析を中心に―」(『仏教史学研究』第三五卷一号、一九九二年、のちに注(9)河内前掲『中世京都の民衆と社会』に所収)。
- (37) 『宗義制法論』上巻(柏原祐泉・藤井学校注『日本思想大系57 近世仏教の思想』岩波書店、一九七三年)。
- (38) 河内将芳「京都東山大仏千僧会について―中近世移行期における権力と宗教―」(『日本史研究』四二五号、一九九八年、のちに注(9)河内前掲『中世京都の民衆と社会』に所収)、同「宗教勢力の運動方向」(歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講

- 座 第5巻 近世の形成」東京大学出版会、二〇〇四年、のちに注(8)河内前掲『中世京都の都市と宗教』に所収)、安藤弥「京都東山大仏千僧会と一向宗―戦国期宗教勢力の帰結―」(『大谷大学史学論究』一一号、二〇〇五年)。
- (39) 真宗については、注(38)安藤氏前掲「京都東山大仏千僧会と一向宗―戦国期宗教勢力の帰結―」参照。
- (40) 大田壮一郎「室町幕府宗教政策論」(注(5)前掲『室町・戦国期研究を読みなおす』、のちに同「室町幕府の政治と社会」塙書房、二〇一四年に所収)。注(3)大田氏前掲「中世仏教史の〈分水嶺〉―ポスト「顕密体制」をさぐる―」参照。
- (41) 川本慎自「室町幕府と仏教」(『岩波講座日本歴史 第8巻 中世三』二〇一四年)。

〔付記〕

本稿は、第六五回佛教史学会学術大会(二〇一四年一月二九日、於佛教大学)での報告を成稿したものである。当日は多くの方々からご教示をいただいた。あらためて御礼申し上げたいと思う。また、本稿は二〇一三―一五年度日本学術振興会科学研究費助成事業・基礎研究C・課題番号二五三七〇八一の研究成果の一部である。

(奈良大学文学部教授 かわうち まさよし)

〔書評〕

同朋大学仏教文化研究所編

『教如と東西本願寺』

一 概要

本書が刊行された平成二十五年(二〇一三)は、本願寺教如の四百回忌にあたる節目の年であった。東本願寺では法要が営まれ、阿弥陀堂においては教如の生涯を追いかけた「教如上人展」が開催された。また、教如をとりあげた研究書も数多く出版され、大桑斉氏著『教如―東本願寺への道―』(法蔵館、二〇一三年)、上場顕雄氏著『教如上人と大坂』(真宗大谷派難波別院、二〇一三年)・同氏著『教如上人―その生涯と事績―』(真宗大谷派出版部、二〇一三年)が世に出ている。まさに宗派においては教如の年といわんばかりの状況だったわけだが、本書もまた右の書籍と同様、教如四百回忌を期に、その人となりを経史的に位置づけていこうと

する試みから編まれた論集である。

まずは本書の構成を示しておこう。

安藤 弥 総論 本願寺教如

―その生涯と歴史的論点

第I部 本願寺教如と東西分派

木越祐馨 教如と石山合戦および在国期の北陸

草野顕之 教如による大坂籠城の理由(コラム1)

遠藤 一 教如と豊臣政権

吉井克信 教如とおふく(教寿院如祐)(コラム2)

岡村喜史 准如の継職から見た教如

川端泰幸 教如の東本願寺創立

松金直美 東西分派後の東本願寺教団

工藤 克洋

第Ⅱ部 教如論の諸問題

金龍 静 教如史料論

安藤 弥 教如教団の地域的基盤

太田光俊 教如とその家臣団

青木 馨 文化人としての教如

山口昭彦 本願寺肩衝(コラム3)

小山正文 本願寺の梵鐘と教如

蒲池勢至 教如の寿像と伝承(コラム4)

本書は、冒頭の総論にて、教如の生涯を概観するとともに、教如について何がわかっていないか、問題点の整理がなされている。

生涯の概観については、①誕生・石山合戦期、②大坂拘様・流浪(秘回)期、③教団帰参・再新門期―豊臣政権期1、④本願寺継職・強制退隠―豊臣政権2、⑤教団独立活動期―「関ヶ原の戦い」前夜、⑥東本願寺の創立・教団整備・死去―徳川政権期という時期区分を設け論じている。教如といえば、信長への徹底抗戦や秀吉による強制退隠、家康の取り立てによる東本願寺創立が、生涯の画期として、よく取り上げられるが、それぞれの前史にも目を配った時期区分であるといえる。

ついで明らかにすべきことについては、①戦国・織豊期の社会における教如の社会的位相、②教如の教団形成をあげている。そして、Ⅰ部で①の課題に、Ⅱ部で②の課題にいうように、総論で指摘した課題を各論で応えていく構成になっている。

二 内容紹介

本書の意義を確かめていくにあたって、本書が教如をいかに位置づけようとしているのかを、総論の紹介を兼ねてみておこう。

死の隣り合わせの戦国乱世であればこそ、人びとは生きる力を求めている。そうした人びとの願いのなかで、教如はみずから「信」に立って生き、生きるよりどころとなるものを掲げ、人びとに戦国乱世を生き抜く力を示した。

(本書4頁)

教如は、本願寺と織田信長が戦った石山合戦において、勅命講和以後も徹底抗戦した人物であり、また東本願寺を創立した人物と知られている。当該期社会においては、かなりの個性を発揮した人物であることは間違いないが、そうである

にもかかわらず、教如の存在意義についてふれた研究が少なくと本書はいう。ではなぜ研究が少ないのか。本書の研究史整理を参照すると、中世後期の研究における本願寺・一向一揆研究の低調化と、真宗史・本願寺教団史における教如の評価があいまいであることを理由としてあげている。そこで本書は、教如の再評価を試みているのであるが、それに際し以下のような視点を提示している。

本願寺教団の門徒が列島社会の広範囲に、潜在的・隔地間的にそれなりに組織的連関をもって存在していたのは事実であり、そこには宗教勢力の持つ独自な地域性、宗教領国性が見出される。本願寺が戦国社会に印象づけた、いわば「仏法領」の世界である。門徒のみならず非門徒も含む多くの人びとが、こうした本願寺をよりどころとして戦国社会を生きようとしたのではなかったか。

(24頁)

教如とともに戦国社会を生きようとした人びとのつながりは、逆に見れば統一政権からは異質なものであった。

(25頁)

「教如とともに戦国社会を生きようとした人びとのつなが

り」とは一向一揆や本願寺の東西分派後の教如に連なった東本願寺教団と言い換えてもよからう。そしてそれは、大名領国とは「異質」な関係によって成り立っているが、列島社会に確かに存在し、「宗教領国」ともいえる世界を形成したといい、教如はその世界の中心にいたとする。こう教如を歴史的に位置づけていこうというのである。

一向一揆や石山合戦といえば、統一政権と武力衝突をしたことから、統一政権と対立する構図で過去の研究ではとらえられているが、そうした見方が見直されつつあるなかで、単に対立的にとらえるのではなく、かといって融和的にとらえるのでもなく、両者の世界を異なる次元に置いて考える点に本書の独自性がある。この視点については、各論考を概観した後には評価を試みたいが、ここでは新たな視点で教如をとらえようと試みている点を指摘しておきたい。

では各論考の紹介に移ろう。

木越祐馨「教如と石山合戦および在国期の北陸」では、石山合戦の後に顕如とは別行動をとって中部地方山間部に流れた教如の存立基盤について分析している。具体的には、大坂退去後の教如が越中国五箇山に姿を現しているという事実の理由について、織田信長と対戦中であつた上杉景勝と加賀・越中一向一揆との連携を指摘している。また、流浪中の教如

が美濃国安養寺に親鸞絵伝を下付した際、取り持ち役であった下間頼純という人物に焦点をあて、彼が天正年間に金沢御堂を進退する地位にあったこと確認したうえで、上杉景勝、加賀・越中一向一揆と教如との結節点になっていたことを明らかにしている。

これまで、教如の流浪は、避難や布教、武田氏との連携が論じられてきたが、本研究により金沢御堂が構築した一向一揆や上杉氏との関係をふまえての流浪であったこと、ひいては信長に徹底抗戦する教如の流浪像がより鮮明になったといえよう。

草野顕之「教如による大坂籠城の理由」(コラム1)では、教如の大坂籠城理由について考察している。教如が大坂拘捕を主張する際、蓮如開基であることを強調している点に注目し、教如は、蓮如のいう「仏法領」の具現化されたものを大坂本願寺と寺内町と考えたとし、抗戦にいたったとする。加えて、石山合戦に参戦した門末の書状を紹介し、門末が大坂籠城を「法を守るための戦い」と述べていることから、教如の意図が門末にも浸透していたことを指摘する。

教如が大坂本願寺と寺内町でうまれ育ったことをふまえれば、大坂という場への執着を、蓮如開基に求める氏の指摘は十分に考えられよう。ただし、同じく大坂にうまれ育った

があるのではないだろうか。

吉井克信「教如とおふく」(コラム2)では、教如の側室であったおふく(教寿院如祐)の出自を考察している。在地伝承から、おふくは貝塚願泉寺初代・了珍と同じく和泉国佐野川新川家の出身ではなかったかと推測する。さらに、おふくの出自が了珍と同じ新川家であると公には語られないことについて言及。願泉寺の由緒では、初代了珍が「京都落人」「日野家の末裔」とされており新川氏出身ということと齟齬をきたすこと、また本願寺教団において教寿院が顕如の正室如春と対立し教如退隠の契機となったり、宣如継職に反発したりするなどして本願寺教団にとって扱いに困る存在であったため、新川氏の出自であることが消された、としている。近世史料からの推論ではあるが、教寿院の人物像を明らかにしていくうえで起点になる指摘といえよう。

岡村喜史「准如の継職から見た教如」は、教如退隠後に本願寺を継職することになった准如の本願寺継職の正当性について分析している。顕如死後の本願寺住持職は、教如が継職した後、秀吉の命によって准如が継職するが、本論では教如の退隠以前に准如による継職の正当性がともなっていたとする。その結論を導く手法として、氏は、門主の法名・俗名の名乗りに注目。本願寺住持となる者は、法号・諱が「○如光

顕如にはそういった意識がないのか。顕如の抗戦の論理との差異はないのかといった点が今後の課題として指摘できよう。

遠藤一「教如と豊臣政権」では、秀吉の九州征伐にともなっておこなわれた教如の九州下向(陣中見舞)を取り上げ、政権との関係を考察している。遠藤論の特徴は、教如の九州下向を、単なる陣中見舞いとしてではなく、豊臣政権下で本願寺教団が担うべき「役務」であったととらえる点にある。その理由は、勅命を奉じて遂行される秀吉の「豊臣平和令」に対し、石山合戦後、惣赦免を受けた当該期の本願寺は、秀吉に「軍役負担」をし、「忠勤」をみせることが必要であったためであるという。

九州征伐における教如の動向に、豊臣政権と教如の関係性を見出そうとする着眼点はとてもユニークである。秀吉の軍事行動が、天皇權威を身にまとい正当性をともなうようになる点を意識しつつ、教如の社会的位相を跡づけていく手法は、今後の研究においても参考とすべきであろう。ただし教如は、秀吉に命じられて九州下向をしたわけではなく、いわば自発的に行っている。にもかかわらず、それを豊臣政権によって定められた「軍役」であったといえるのであろうか。自ら秀吉への「忠勤」を示すという意味で九州へ下向したという氏の説明は理解できるが、「軍役」であったという理解は飛躍

○」となる傾向を見出し、准如の名乗りもそれに準じている(「准如光昭」)ことから、顕如の後継者たりうる地位にあったと結んでいる。ただしそうなると教如が「教如光寿」と名乗り、継職者たる要件を満たしていることが問題になってくるが、その点については、教如が抵抗の姿勢をとらなかったとし、さらには本願寺が門跡寺院であったため、叡慮を経て太閤・秀吉、関白・秀次が諸事を施行する朝廷秩序に基づく退隠手続きに、教如は従わざるを得なかったとしている。

氏の見出した歴代門主の法名・俗名の規則性は、各歴代が誰を後継者にしようとしていたのかを考えるうえでひとつの見方となるであろう。また、継職問題を、遠藤氏と同様、朝廷秩序の枠組みを設定してとらえようとする点に氏の議論の新しさがある。ただし、「○如光○」の名乗りが継職者の証だとするが、それは結果的にみえることである。「○如光○」の名乗りを付与することが、後継者であることを公に示すものであるという当該期の手続きなり認識を復元しなければ、名乗りのみから継職の正当性の有無を論じることの妥当性は確保できないのではないだろうか。

川端泰幸「教如の東本願寺創立」は、退隠期から東本願寺創立までの教如の活動を史料に即して復元し、東本願寺創立の諸要素を抽出する。東本願寺創立といえば「権現様御再興

御取立之本願寺」と徳川家康による取り立て、特に本願寺を分裂させるといふ政策面から説明されることが多いが、本論では、そういった言説が、近世の東本願寺再建事業を幕府に説明する場面や西本願寺との正嫡論争からうまれたものであったとして退ける。そのうえで、退隱期の教如の活動に着目。「宗主」として仏事勤行に精を出す僧侶としての活動を継続していることや公家・武家と親密な交友関係を維持していることをあげ、秀吉の命によって隠居の身となりながらも教如の社会的地位が全く低下していないことが明らかにしている。また、東本願寺創立については、茶会を通じた家康との私的関係を重視しつつも、家康政権が行った寺領安堵政策も創立の要素ではなかったかと指摘する。東照権現の取り立てという、東本願寺側の言説から説明されることが多かった東本願寺創立について、教如の社会的地位と徳川政権の本願寺だけに限らない寺社政策の観点から創立理由を跡づけた点に成果がある。

松金直美「東西分派後の東本願寺教団」は、東西別立後の教団のあり方について、特に別立によりどちらに属せばいいのか判断に迷う門末の姿とその門末を取り込むべく礼銀の減免をする東西本願寺の様子を明らかにするとともに、宣如継職問題や承応の閼牆といった東西両本願寺教団の内紛が門末

と、継職後の教如は顕如の御影を下付し継職の正当性を明示していること、東本願寺造営前の慶長六年（一六〇一）に法宝物下付が本格化するものの、慶長十四年（一六〇九）から減少傾向にあること、さらに准如が慶長期から木仏裏書を出し始めることが指摘されており、その意味づけが今後の課題となる。

法宝物の分析からは、文献だけでは見えてこない門主の活動の画期が浮かび上がる。今後のデータの蓄積によって、ここで論じられている画期は変わる可能性もあるが、文献資料一辺倒ではなく、法宝物下付から得られる知見とあわせて本願寺の歴史を論じていくことが求められよう。

安藤弥「教如教団の地域的基盤——三河を事例として——」は、教如と地域教団との関係について、三河門徒を事例として、法宝物の下付状況をふまえて検討を加えている。本論では、まず両者の関係について、石山合戦後の流浪中の身である教如から、法宝物の下付を多く受けていることを指摘しており、教如が自身の基盤として三河教団を重視していたことを明らかにしている。そのうえで、三河教団の実態に迫り、上宮寺を中核とする体制が確立していたこと、それは本願寺教如および地域権力である家康の双方の合意のもと形づくられており、教如が秀吉によって退隱に追い込まれた後も、教如の

との関係にも影響している様子を描いている。

本論は創立（別立）をひとつの到達点としてみてしまうことで見落とされがちな近世初期の東西本願寺の教団の状況が復元されている。本願寺を恐れた幕府が、別立によって本願寺の勢力を削いだという理解は古くからあるが、幕府の目線ではなく、教団内部の状況を詳しく追った点が評価できよう。分裂による負の側面を改めて考えさせてくれる論文でもある。門末側がこの混乱を経て、どのように東西本願寺を認めていたのか（認めなかったのか）が今後明らかにすべき課題であらう。

金龍静「教如史料論」では、教如花押の変遷と教如下付の法宝物について分析が加えられている。花押の形の特徴とその時代的な差異や添状を発給する側近の変遷が跡づけられており、教如の無年記文書の年代比定に供されることであろう。法宝物の下付については、年次別・下付物別にリスト化し、教如の法宝物（御影）下付の特徴として、天正九年（一五八一）に始まり一年で収束していること、そしてその時期には証如御影の下付が極端に多いことを指摘。流浪期の教如が、前住を父の顕如ではなく祖父の証如と位置づけていたのではと推測している。また、天正十年以降の法宝物下付の傾向として、本山移転の時期であるが顕如の御影下付が減少するこ

地盤として機能していたことが明らかにされている。ただし、三河門徒のあり方については、一向衆を禁制していた家康の支配が及びにくい南三河地域にもひとつのまとまりがあることや、教如の地方門徒掌握の手法のひとつである一族の派遣もみえ、三河国内においても門徒のまとまり方やまとめ方に多様性があることもあわせて指摘されている。

門徒のまとめ方に、従来からある在地寺院が中核となるパターンや一門衆が派遣された寺院が中核になるパターンがあるという指摘は、今後、教如と地方の門徒の関係を考えるにあたって参考にならう。ただし、一地域において、右のような多様性があるとしたとき、この多様性はいかなる意味を有したのかといった点に言及がない。「一枚岩ではない教如派三河教団の実態」はよくわかるが、在地秩序を教如のもとに組み替えていく転換点であるのか、はたまた一門衆の派遣理由である教義面の充実のみに止まる棲み分けを示すものなのか、復元からみえてくる歴史的評価を俟ちたい。

太田光俊「教如とその家臣団——御家中衆座列閼連史料の紹介——」では、教如の家臣団について、「教如様御代已来御通」「東本山家臣座次興廢次第」「東江御別之衆古座」という史料を紹介し、各史料の性格をおさえたうえで記載された家臣がいつ頃の家臣であったのかを比定している。本願寺が分立

していくなかで、教如を実務面において支えた家臣の存在が明確になったといえよう。諸史料にみえる家臣の活動を理解するうえでも貴重な成果といえる。問題は、筆者も指摘していることであるが、後世になって書かれたものであるため、同時代史料とのつき合わせが求められるという点である。一次史料に基づいた家臣団研究の進展を期待したい。

青木馨「文化人としての教如―自筆書状にみる交流―」は、茶の湯を通じた教如の武家・公家との幅広い交流を復元している。なかでも金森長近との関係に着目し、この関係が教如の家康へ接近を可能にしたと指摘している。また、教如の茶人としての素養にも言及。茶会に招かれている面ばかりが指摘されているが、そういった一面だけではなく、武將を茶会に招き主体的に交流を広げ深めようとする教如の姿勢が描かれている。

茶を紹介した交流が、文化的な側面に止まるのではなく、教如の社会的地位（武家との関係や公家社会における位置）を形づくるという視座は、教如の人間関係を考えるうえでは重要であろう。ただし、茶会に呼ばれてきた交流と茶会に招待してできた交流に差異を見出すべきではないだろうか。招待された場合は偶然知己を得ることになったのであろうし、招待した場合はその客に主体的にかかわろうとした意図をよ

末年以前の巨鐘で第五位に位置するという、その意匠は慶長以前ではめずらしい朝鮮の梵鐘に様式が通じるという。また、梵鐘の製造者である浄徳について、法名が真宗的であることから真宗門徒である可能性と、梵鐘の龍頭の形が住吉我孫子の鋳物師・杉原家次作の園城寺鐘（慶長七年）や京都本禅寺（慶長十一年）の梵鐘を同一系統であることから、我孫子の鋳物師である可能性を指摘している。

教如以前の本願寺における梵鐘については、諸史料から山科・大坂本願寺に梵鐘が存在していたことを明らかにし、儀式を始める際の相図として用いられていたことが明らかにされている。また、初期真宗の寺院においても梵鐘が備わっていたことを明らかにし、教如の梵鐘鑄造は特異な事業ではなく、本願寺の伝統に基づくものであると結ぶ。

氏の指摘で興味深いのは、当時ではめずらしい部類に入る朝鮮の意匠を取り入れているという点であろう。この梵鐘は、教如の対外的な認識をうかがうことができる文化財であるといえそうである。個人的な関心ではあるが、気になるのは、寺内で梵鐘を鑄造していることである。中世後期において、鐘鑄は神社の勧進の見世物としてしばしば行われている。いわば興行の場となっているわけであるが、そういった勧進的な要素が、教如の梵鐘鑄造時にはあったのか否か。鑄造空間

みとることができるからである。どのような人脈形成を考えていたのかという点にまで踏み込んで検討していくことが今後の課題であろう。

山口昭彦「本願寺肩衝」（コラム3）では、本願寺肩衝の価値について論じており、この茶器が本願寺家督継承の証であったことや、千利休が評価し細川忠興が所望するなど当該期の茶人の間でも評価が高かったことが示されている。また、教如および本願寺歴代の茶人としての力量が史料をもとに明らかにされている。本願寺肩衝を所有することが、本願寺住持であることを示すものであり、教如が大坂退城の折に持ちだしているという事実は興味深い。ただし、これをどのような評価するかが問題になってこよう。氏によれば、教如は側室の教寿院に本願寺肩衝を形見分けしているという。後に宣如に渡り、近世においては歴代に伝受されるが、いつから本願寺住持であることを示す宝物となったのが明らかにされなければならないであろう。

小山正文「本願寺の梵鐘と教如」は、教如が鑄造した梵鐘について、その特徴を明らかにするとともに、それ以前の本願寺における梵鐘について論じている。慶長九年（一六〇四）に教如が鑄造した梵鐘は、総高二五・六〇cm、口径一五・六〇cmで、当時においてきわめて巨大な部類に入り（慶長

の復元を期待したい。

蒲池勢至「教如の寿像と伝承」（コラム4）は、教如寿像と教如伝承の存在意義について考察している。氏は明治十一年の『僧侶明細帳』より、教如が歴代の門主のなかでもとりわけ多くの寿像（生前の姿を描いた像）を下付していることを指摘し、教団の創設にあたり、宗主という立場の権限を確立・強化し、門徒を教団に結集させたとする。また、寿像については、縦三八・五cm、横一八・一cmの小柄な寿像の存在に注目し、このサイズの寿像は寺院ではなく、一般門徒の仏壇用に掛けるものであったとし、門徒と直接結びつこうとする教如の意識を指摘している。加えて寿像は教如伝承を史実化するアイテムとして機能したともいう。

教如が他の歴代と比べて寿像を多く下付しているという指摘は、教如の個性を探るうえで興味深い指摘であろう。その理由について、宗主の権限を強化していることとする狙いが教如にあったという氏の評価も首肯しうる。ただ、そうなる、なにゆえ他の歴代は寿像が少ないのが気になるのである。「生きた姿」を下付することの意味を掘り下げることが必要になってきそうである。

また、教如伝承についてであるが、寿像が伝承を裏付けていくという氏の指摘は、教如が意図する門徒との結びつきを

強化しようという寿像のもつ働きとは異なる働きが在地で作用していたことを意味しよう。教団化という枠組みではとらえられない寿像の機能が見いだせるわけであるが、これは在地での慣行から地域の信仰を考える氏ならではの視点から導きだされた指摘であるといえよう。では逆に、こういった在地での慣行を教如はどう眺めていたのかが気になるところである。

三 成果と問題点

各論考を紹介したが、最後に本書を総合的に見た時の、教如研究における本書の成果と課題を述べ結びとしたい。

まずは成果について、以下の三点をあげておきたい。

成果の第一としてあげたいことは、新たな事実の究明、とりわけ教如の広範な人間関係が解明された点にある。大坂拘様で対立した父の顕如、退隠時に対立した母・如春尼、本願寺を分け合うことになった弟・准如や信長・秀吉・家康といった天下人との関係ばかりが論じられてきたが、教如の妻子や家臣団、戦国武将や公家との公私にわたる広範な交流が明らかにされた。このことが、教如の社会的地位をより明確に位置づけることにつながったといえよう。とりわけ、秀吉によって退隠させられた後の教如が、武家・公家との交流を続

される日も近いのではないだろうか。

三点目は、教如を分析する基盤および方法論が提示されたことである。生涯年表や詳細な家族関係を示す系譜の充実のもとより、教如花押の変遷や教如をとりまく家臣団・御堂衆の復元は、教如に限らず東本願寺の研究を進めるうえで必ず活かされていくであろう。

また教如の事績を復元していくうえで、本書では、寺院に伝わる法宝物等の史料調査に基づく知見が多くうかがえる。今後調査が進むにつれ、データの蓄積がなされていくことであろうし、その蓄積によって本書で例示された教如像とは異なる人物像も提示されることであろう。法宝物から立論していく方法は、教如研究に限らず、広く真宗史を学んでいくうえでも、きつと踏襲されるはずである。分析方法を学ぶうえでも、本書は参考になる論集であるといえよう。

ついで本書の疑問点について述べておきたい。

先にみたように、本書においては、教如を「生きる力」を示し、「生きるよりどころ」となった人物であると位置づけている。こう教如を位置づけようとするについて、評者としては異論はない。むしろどのような「生きる力」を示したのか、そしてどのような「生きるよりどころ」となったのかは大いに期待していたことである。ところが、その点がま

けており、実質的な地位の低下が全くみられなかったことがわかったのは、秀吉による退隠という処遇の内実や、東本願寺創立にいたる流れを考えるうえで参考になることであろう。二点目は、これまでの教如論にはない新たな切り口を提示している点にある。なかでもおもしろい視点は、豊臣・徳川政権と教如の関係性である。豊臣政権との関係については、秀吉の九州征伐の見舞いに赴く教如の姿から秀吉への軍役奉仕と読み解いているが、その歴史的評価はともかくとして、視点自体は、秀吉との関係を退隠事件一辺倒で語るこれまでの教如論は一線を画すであろう。

家康との関係についても、慶長七年の東本願寺創立を、家康との個別的な関係のみに求めるのではなく、同年になされた徳川政権の寺社領安堵政策から導く視点は、家康個人の意図からではなく、徳川政権の政策方針を意識したものである。本願寺側から位置づけられることの多かった教如は、本書が課題としてあげられているように、ここに至って当時の社会状況から位置づけがなされたといえる。真宗史における教如の位置づけも、総論で述べられているとおり、これまでの研究において、きちんとなされておらず、今後重要な課題であることに違いないが、当該期社会に位置づけていくという視座を持ち続けてゆけば、教如が時代を象徴する人物としての評価

つたく論じられていないのである。

教如が「生きる力」をどう示し、そしてどのような「生きるよりどころ」になったのかについて、大桑斉氏は、教如が一向一揆として戦う門徒のよりどころであり続けた点に、教如の存在意義を見出している。そしてかかる視点から、教如の教団化の画期を、東本願寺の創立に求めるのではなく、大坂退城の「秘回」期に求めている（「秘回」という言葉は、小泉義博氏が「大坂退城後の教如が飛騨山間部を流浪している状況を表現したものである」（大桑斉氏著『教如―東本願寺への道―』法蔵館、二〇一三年）。大桑氏によれば、教如が示した「生きる力」とは仏法を守るため一向一揆として戦い抜くことであり、流浪の身ではあるがなおも抗戦しようとする教如の姿に呼応する門徒がいるという状況が生じている以上、教如はこの時期にすでに「生きるよりどころ」であったというわけである。

この理解について、異論も多くあるだろう。本書においても、大桑論を「教如研究の一つの到達点」というべき内容であり、本稿冒頭の論述はこうした問題提起を意識した表現でもある」としつつも「理念をめぐる考察は別の視点・表現からもなされるべきであり」と評価している。しかし、そうであるならば、本書において教如が示した「生きる力」とはどの

ようなものであり、かつ「生きるよりどころ」としてどう教如は存在していたのかを示すべきではないだろうか。

仮に「生きるよりどころ」を教団の成立とするにしても、いつその教団が成立したのかという点が説明されていない。東本願寺の創立がさまざまな要素によってなることや、地域の教団も一枚岩ではないということが明らかにされていることから、教団の確立が論じにくいということはわかるが、何をもちて教如教団の成立とするのか。成立要件Ⅱ歴史的評価を、今後の研究で期待したい。

もう一点、疑問点をあげておきたい。本書では、教如を当該期社会に位置づけるべく、織豊政権や徳川政権との関係を強く意識している。この点については評価しているが、とするならば、総論にみえる「教如とともに戦国社会を生きようとした人びとのつながりは、逆に見れば統一政権からは異質なものであった」という評価はどのような意味をもつのであろうか。教如が率いる一向一揆や教団を、統一政権からみて「異質なもの」とするが、本書で明らかにされているのは、秀吉の軍役奉仕に応じなければならなかったとする教如や朝廷秩序のもと秀吉による退隠に抗わなかった教如であり、統一政権の枠組みのなかで行動する教如である。

大桑氏は、世俗社会における僧俗未分離を解体していくの

が統一政権であるという議論を展開している（大桑斉氏著『教如―東本願寺への道―』法蔵館、二〇一三年）。氏の理解を、本書の表現をもとに言い換えるならば、「異質な世界」は統一政権によって解体させられたといえよう。つまり、研究において議論されてきたことは、本書でいう「異質な世界」が統一政権によってどう解体させられたのか、「異質な世界」のその後なのである。ところが本書には、「異質な世界」の存在を認めつつも、その行方については論じていない。そもそも、統一政権に「異質な世界」を解体する意図があったかどうかとも問題になるのであろうが、「異質な世界」を認める立場であるならば、それを含めて統一政権が目指した社会（支配）と教如がめざした具体的な社会（教団）像を提示し、そのうえで両者がどのような関係（協調・対立の二面）にあったかを説明することが必要ではなかっただろうか。

ところで、話は冒頭の「教如上人展」にまで戻ってしまうが、本展示はかなり盛況だったようで、多くの人が阿弥陀堂に足を運んでくれたようである。その来場者のなかに、自坊に展示品と似たようなモノを持っているが、教如関連であることを知らなかったという方がいくらかいたという。いまだ世に知られていない教如関連の史料が全国に眠っていること

がうかがえ、研究する余地が大いにあることを思わせてくれるが、この来場者の一言は、裏を返せば、東本願寺の開祖であるにもかかわらず、宗派内における教如の認知度はあまり高くないことを示している。御遠忌を機に教如は脚光を浴びた。本書を手にとって、教如への理解がより多くの人に深まることを祈念して擲筆することにした。

（法蔵館、二〇一三年二月一八日刊、A5、二九二頁、六〇〇〇円）

（同朋大学仏教文化研究所員 くどう かつひろ）